

露地抑制作型向けかぼちゃの新品種「栗のめぐみ2号」

村田 奈芳¹⁾・嘉見 大助²⁾

¹⁾農研機構北海道農業研究センター 研究推進部研究推進室・

²⁾農研機構北海道農業研究センター 寒地野菜水田作研究領域

1. はじめに

カボチャは全国での栽培面積が1万3,600ha、年間の収穫量は16万4,000tで、北海道をはじめ長野県、鹿児島県、茨城県などで広く栽培されている。一方、端境期にはメキシコやニュージーランドなどの海外産が年間約6万t輸入されており、加工業者からは国内産の周年供給への強い要望がある。本州および九州の产地では普通作型のほかに早熟作型や抑制作型による栽培が行われ、端境期出荷の取り組みが進められているものの、既存の品種の多くはつる性であるため、栽培中に整枝作業を必要とすることや果実の着果位置が安定せず、収穫時に果実を探す作業が大きな負担となっている。このことから、省力的に抑制作型で栽培できる品種が求められていた。

農研機構北海道農業研究センター（以下、北農研）では、1997年から短節間性かぼちゃ品種の育成に取り組んできた。これまでに、F₁品種「TC2A」（商品名：ほっとけ栗たん）、「くりひかり」、「ジェジェJ」および「おいとけ栗たん」を育成してきたが、これらの品種は気象条件により株元着果が安定しないなどの問題があった。そこで、抑制作型においても短節間性を示すとともに安定して株元に着果し、食味の良いセイヨウカボチャF₁品種の育成を行った。

2. 品種育成の経過と現状

「栗のめぐみ2号」は、北農研と朝日アグリア株式会社との共同育成によるセイヨウカボチャF₁品種である。2018年に、朝日アグリア株式会社が開発した着果性に優れる種子親品種「親K」と、北農研が開発した短節間性の花粉親品種「北海8号」との交雑組み合わせより得られたF₁系統について、2年間の抑制栽培試験を実施したところ、短節間性を有し、高乾物率で食味の優れることが確認された。そこで同系統につ

いて2021年および2022年に地域適応性試験を実施したところ、草姿特性および果実特性において優れた成績を収めたので、朝日アグリア株式会社との共同育成品種として品種登録を行った（品種登録出願番号：第37608号、2024年9月17日出願、2024年12月20日出願公表）。

「栗のめぐみ2号」の栽培用種子は2025年12月より市販される予定であり、九州・沖縄および北海道での普及が見込まれている。

3. 品種のポイント

「栗のめぐみ2号」の特性は、以下のとおりである（表1）。栽培試験は北農研の研究圃場において標準品

表1 「栗のめぐみ2号」の特性概要¹⁾
(2021~2022年)

品種名	栗のめぐみ 2号	えびす	ジェジェJ
草姿	短節間	つる性	短節間
節間長(cm) ²⁾	20.5	64.4	25.0
側枝数(本/株)	1.4	3.3	1.9
雌花開花日 ³⁾	54	54	54
雄花開花日 ³⁾	46	47	47
着果距離(cm) ⁴⁾	38.7	108.1	60.2
株元着果率(%) ⁵⁾	87.8	38.3	76.1
果実数(個/株)	1.0	1.3	1.1
果実重(kg/果)	1.0	1.1	1.1
果実形	扁円	扁円	扁円
果面の地色	黒緑	緑	黒緑
果肉色	濃黄～橙黄	濃黄	濃黄～橙黄
赤道部果肉厚(mm)	22.2	20.0	21.5
果肉糖度(°Brix)	10.6	10.6	12.1
果肉乾物率(%)	18.4	14.4	20.2
果肉の質	粉質～中間	中間～粘質	粉質～中間

注1) 農研機構北海道農業研究センター研究圃場において抑制作型で栽培試験を実施した。数値は2か年の平均値。各年次1品種10株×3反復を供試。

2021年6月9日播種、6月26日定植、10月1日収穫
2022年6月1日播種、6月24日定植、9月26日収穫

2) 株元から15節までの距離

3) 定植後日数

4) 株元から第一果までの距離

5) 株元から60cm以内に第一果が着果した株を株元着果株とし、全株数に対する割合を算出した。

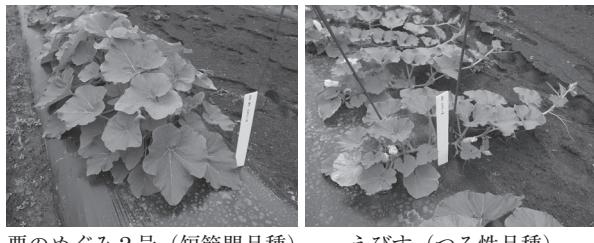


写真1 草姿の比較

種として「えびす」、対照品種として「ジェジェJ」を用いて抑制作型にて2か年行った。

1) 生態的および形態的特性

「栗のめぐみ2号」の主枝の伸長は、生育初期から中期にかけてゆっくりと進み、15節までの節間長は「えびす」の半分以下と短節間性の草姿を示す(写真1)。そのため、「栗のめぐみ2号」は「TC2A」などと同様に密植栽培を行うことができる。側枝の発生は「えびす」より少なく、整枝作業の省力化が可能である。しかし、生育中期以降から徐々に主枝は伸長して普通草姿となる。「栗のめぐみ2号」における雌花および雄花の開花時期は、「えびす」や「ジェジェJ」とほぼ同等である。つるが伸びきらない時期に雌花が開花するため、「栗のめぐみ2号」は「えびす」と比較して株元近くで結実する。対照品種の「ジェジェJ」と比べても着果距離が短く、株元着果率は90%近い値を示した。

2) 着果および果実特性

果実重は「えびす」や「ジェジェJ」と同等である。表1の結果は、北海道で一般的に行われている普通作型より播種・定植時期が1か月ほど遅い抑制作型での栽培によるため、定植後の気象条件の影響を受けて全般に果実が小ぶりとなった可能性が考えられる。「栗のめぐみ2号」の果実形は「えびす」や「ジェジェJ」と同様に扁円で、果皮は黒緑色で淡緑のすじを有する(写真2)。

3) 果肉特性

「栗のめぐみ2号」の果肉色は濃黄～橙黄色であり、



写真2 果実外観

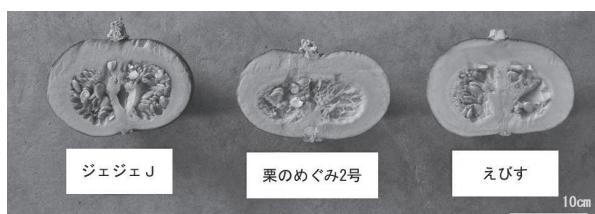


写真3 果実縦断面

赤道部の果肉の厚さは「えびす」に比べてやや厚い(写真3)。また、果肉糖度は「えびす」と同程度で、食感の指標となる果肉乾物率は「えびす」より高く、加熱調理をしたときの食味調査では「栗のめぐみ2号」は粉質(ホクホクした食感)を示した。

4) 栽培方法

「栗のめぐみ2号」は、全国の普通作型～西南暖地の抑制作型の栽培に適する。うどんこ病の抵抗性は既存品種並みであるため、こまめなうどんこ病防除が必要である。

4. おわりに

日本におけるかぼちゃ栽培面積は減少傾向にある。その理由の一つとして、従来のつる性品種では整枝作業や収穫作業が機械化されておらず重労働になっていることが挙げられる。大規模露地栽培を行う北海道では収穫の機械化が必須であり、果実が安定した位置で着果することは一斉収穫が可能になるなど機械収穫にとって有利な形質であることから、本品種が北海道や本州で抑制栽培に取り組んでいる産地で広く普及していくことが期待される。

〒062-8555 北海道札幌市豊平区羊ヶ丘1番地

(むらた なほ、かみ だいすけ)